



TITLE:

# 江西堤督金聲桓とその反亂

AUTHOR(S):

渡邊, 修

---

CITATION:

渡邊, 修. 江西堤督金聲桓とその反亂. 東洋史研究 1990, 49(3): 517-543

ISSUE DATE:

1990-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154339>

RIGHT:

# 江西提督金聲桓とその反亂

渡邊修

はじめに

一 江西略定以前の金聲桓の事跡

二 江西略定の過程

(一) 江西西北部

(二) 江西東部

(三) 江西中西部

(四) 江西南部

三 金聲桓と清朝の江西への施策

(一) 王體忠との争い

(二) 孫之綱との確執

四 江西略定後の官兵布置

(一) 反亂の原因

(二) 反亂の経過

(a) 金・王の動向

(b) 江西西北部

(c) 江西東部

(d) 江西中西部

(e) 江西南部

おわりに

はじめに

順治元年（一六四四）入關した清朝は、同年中にほぼ華北一帯を定め、翌年李自成、福王の政權を倒して浙江・江西・湖廣の大半を略定し、三年には福建・廣東・四川の一部がその版圖に入った。この時点で、西南中國では桂王政權が抵抗を續行しているものの、清朝の中國統一の形勢は決定的となったのである。

清朝はこの時期から基盤を確立するため、内治を重視しはじめる。その方針の一つとして、明末の混乱の中で兵力を背景に力をのばしてきた漢人武將（とくに清の入關以降これに來歸した武將。清朝も入關當初は中國支配をすすめるため、彼等を優遇した）への抑壓が強まる。順治四年には、この壓カへの不滿を明らかにした幾人かの漢人武將が罪をきせられ殺される。<sup>(1)</sup>また一部の者は桂王政權や李自成・張獻忠の餘部と連絡をとりつつ、清に叛旗を翻す。かかる反亂は、一時的には勢力を振っても、結局大勢を挽回できず個別に擊破されてしまうのであった。

筆者はかねてから明末清初の動亂期において漢人武將の果たした役割に注目し、中でもいったん清に來歸しながら再び叛いた「逆臣」に興味を抱いていた。「逆臣」がなぜ「逆臣」とならざるをえなかったかを追求する事によって清朝の武官への對應が理解でき、さらに清の統一がどのように完成したかを知る一つのポイントになりうると考えたからである。そこで先の姜瓖（大同總兵姜瓖とその反亂『史苑』48—1、一九八八）に續いて同じ「逆臣」の金聲桓を取り上げて、金の反亂前の動向や反亂の經過等を紹介しつつ清初の漢人武將の位置について考えてみた。

なお本稿も前掲拙稿と同じく軍事行動關係の記述が多い。それらは『明清史料』・『三藩紀事本末』・『小腆紀年附攷』・『順治實錄』等や各州縣の地方志の記事を根據にしたが、煩雜になるのを避けるため、多くの注を省略した點を了承されたい。

## 一 江西略定以前金の聲桓の事跡

金聲桓は明末遼陽で生まれ、天啓元年（一六二一）、清の太祖が遼東を征服した際に家族と脱出、皮島の毛文龍の部下となり毛士垣（桓？）と名のついていたが、毛の死後は旅順に駐した黃龍の下で都司となる。後、明に叛いた孔有徳が、崇禎六年（一六三四）清に投じた際は、孔を討つべく尙可喜（都司）と出陣したが、實際には事態を觀望するのみであった。<sup>(2)</sup>同年七月、清が旅順を襲うと金は單身關内へ逃れ、やがて有力な武將左良玉の部下として各地を轉戦する。十二年頃に副將

となり、十六年末には徐州副總兵として附近の盜を討つ。ついで湖廣巡撫何騰蛟の推薦で援勦總兵の銜を受ける<sup>(3)</sup>（當時彼の部下として金成功〔聲桓の兄か〕・劉一鴻〔恐らく劉一鵬〕の名が見える）。翌年（一六四四）夏には史可法に屬し淮陽に在ったが、十月、左良玉や何騰蛟の駐する湖廣に移動した。

當時左良玉は福王政權を牛耳っていた馬士英らと合わず、順治二年（弘光元年、一六四五）三月、馬ら君側の奸を討つと稱して舉兵、長江を下った。左良玉は進軍途中九江で病死し、子の夢庚が部下と安徽に進んだが、黃得功に敗れ再び九江へ退く。そこへアジゲの率いる清軍が到り、夢庚はこれに降る。同じ頃南京の福王政權もドドの軍の前に瓦解し、江蘇・安徽・湖廣（湖北）の大半は清領と化したのである。

ドド・アジゲに降った漢人武將のうち左夢庚・劉澤清ら高い官位と多くの部下を擁している者は兵權を奪われ、北京で清朝の看視の下に餘生を送らされる。より地位の低い總兵・副將中には主將と北京へ赴く者、これを機に歸農する者もあったが、多くはそのまま清朝下の官兵（所謂錄營）に組み込まれる。左の部下では總兵盧光祖と李國英（後四川巡撫）が北京へ北上、他は左良玉以來の任地の湖廣に配されたが、<sup>(4)</sup>金聲桓はこれに同行せず、アジゲに對し、江西に留まって清のため各地を平定したいと申し出る。アジゲはこれを許し、また先に清に降ったもと李自成の部將王體忠の兵をも留め、金と協力させる。そして恐らく金に乞われるままに「提督江西全省軍務糧餉總理撫勦等事駐劄南昌掛討逆將軍印總兵官左都督」<sup>(5)</sup>の肩書を與え、王を副將とする。

アジゲが來降してまもない金聲桓にかかる重要な職を與えたのは、恐らく金が遼人（遼東出身の漢人）のためであろう。遼東より興った清朝は、遼人を利用しその協力を得つつ發展してきており、金も清朝が遼人の自分にある種の親近感を抱いている點に氣づいたであらう。入關以前より清朝の下で働いてきた遼人が重視されるのは當然であるが、さらに太祖の迫害を避けて關内に亡命した遼人についても、已に入關を果し中國統一を目指す清朝にとっては、亡命したが爲に關内の事情に通じている彼らを利用するのが得策であった。<sup>(6)</sup>

以下章を改めて、江西略定を委ねられた金聲桓が、いかに南明勢力を排除しつつ自己の権力を固めていったかを見てみたい。

## 二 江西略定の過程

順治二年五月、金聲桓と王體忠は九江府城（德安）に入った（九江府下の縣は先にアジゲに歸順）。彼らは南昌・南康・瑞州の各府に歸順を勧める檄を送る。南昌府（省城）の江西巡撫（福王から任命される）曠昭は、降服は拒否したが、兵力ではアジゲを後楯とした金にかなわぬと見て吉安府へ撤退する。残された士民が歸順の意を傳えると、金は六月十九日南昌に入った。

以後彼は八旗兵の力を借りずに、王體忠（後王得仁）や劉一鵬を督して江西を略定してゆく。今その概略を『順治實錄』・『明清史料』・『小腆紀年増攷』・『三藩紀事本末』や地方志などに據りつつ、地域ごとに述べてみたい。

### （一）江西北西部（南昌・九江・南康・瑞州）

ここでは當初殆どどの州縣が、金聲桓の檄に應じて來歸したが、後薙髮令が下り（省城には閏六月二十八日到る。『明清史料』丙編第五本四九七頁〔以下丙・5・497と記す〕「江西提督金聲桓呈總督修文」）、一方で唐王や魯王の活動が知れると、各地で舉兵が相次ぐ。主なものは①寧州・武寧の許文龍（南明の監軍道）・張雲龍（張猶龍とも記す）、②瑞州の曹志明（上高縣の舉人）・陳泰來（新昌縣の人、南明の副都御史）、③九江の李含初（德化の人）・郭賢操（德安の人）らである。このうち許文龍（雲樓とも記す）は、清の寧州知州萬仁を逐い、「僞知州」黃鍾を立て、許自身は奉郷の山寨に據ったが、三年四月清軍は寧州を取って黃を捕縛し、ついで山寨を陥し許を殺す<sup>7)</sup>。また陳は許と連絡しつつ上高、新昌を取り瑞州府城（高安）を圍んだが、省城や袁州の官兵に敗れる（三年春頃）。九江の李も清將余世忠（明よりの降官）に斬られ、郭も一時德安、建昌二縣

を奪ったがすぐ捕われた。

(二) 江西東部〔湖東〕（饒州・廣信・建昌・撫州）

饒州府については各地方志に薙髮令以後「土寇」が蜂起したとされる。官紳としては明の知縣胡定海が德興で舉兵したのが目立つ。廣信府の情況については不明な點が多いが、當初は福建の唐王政權の官吏が駐していたようである。三年以後東進してきた清軍のため、三月二十日に貴溪が、四月二十一日に鉛山が（主事萬文英が死）、二十五日に府城（上饒、巡撫〔一に巡按〕周定勳らが死）が相次いで陷落する。<sup>(8)</sup>

撫州・建昌兩府は三年秋まで明・清兩軍の爭奪の場となった。以前より建昌に封ぜられていた益王は、南京陷落後支族の永寧王と共に義兵を集めていた。二年七月、金聲桓は王體忠にこれを討たせ兩府城を奪う。王が引上げると、寧都に退いていた永寧王が「峒寇」<sup>(9)</sup>（畚族か）の張安と反撃し、八月撫州を奪還する。しかし三年一月頃清の劉一鵬が再び撫州を取り永寧王を捕えた。

建昌府も永寧王の奪還以後清軍の攻勢を受け、三年四月頃にはほぼ全城が清の手に歸したが、瀘溪縣のみは貢生魏一柱らの活躍で四年四月まで抵抗を續けた。

湖東一帯での復明抗清の動きは宗室や官紳を中心に根強いものがあつたが、結局は清軍の壓迫を受け衰えていく。この後は揭重熙（臨川の人。唐王の給事中）・傅鼎銓（臨川の人。明の檢討）が浙江・福建との境界の山地でゲリラ戦を行うのみとなった。

(三) 江西中西部（吉安・臨江・袁州）

この地域では主に官紳が福建の唐王を奉じつつ清軍と戦った。臨江府は二年閏六月頃清に歸順し、九月に楊廷麟・劉同

升（後述）の兵が府城（清江）に迫るが兵糧が確保できず撤退する。

吉安府（廬陵）は二年七月頃より三年三月に占領されるまで、江西西部の抗清の據点であった。當初清の副將劉一鵬は抵抗を受けずに府城に入ったが、ほどなく劉士楨（龍泉の人。南明の通政使）・劉同升（吉水の人）・王寵（吉水の人。『明清史料』や地方志に見える「王來八」か）が相次いで舉兵し、劉士楨が府城を復した。八月には劉一鵬が逆襲、府城を取り返しさらに萬安縣を陥して南昌から退いていた前江西巡撫贛昭を捕える。そこへ贛州から北上してきたのが楊廷麟（清江の人。南明の左庶子）と劉同升で、再度府城を奪う（二人の兵は前述の如く臨江府に近づくが後引上げる）。改めて南下した清軍は速戦を避け、府城をじっくりと圍む（二年十月）。この頃湖東には永寧王が、吉安以南には楊・劉が在って唐王政權を守りたてていたのである。唐王は楊を大學士、劉を南贛巡撫とし、また先に楊嗣昌や史可法の下で軍務に賛畫した萬元吉（南昌の人）を江西・湖廣の總督として派遣した（十二月劉が病死し萬が巡撫を兼ねる）。

清軍は江南からの援兵を得て、三年一月十八日府城を攻めたが楊廷麟下の廣東の兵に敗れ、援兵の總統副將高友才が戦死する。<sup>(10)</sup>しかし萬元吉は軍令が嚴格に過ぎ、また楊が招撫した「峒寇」張安らの兵（唐王より龍武新軍と命名）を重んじ、早くから楊の下に在った廣東・雲南の兵を蔑視して兵士の不満を招いた。これに乗じて副將高進庫らの清軍は攻撃を再開、三月二十四日これを陥し、萬・楊は南へ逃れる。<sup>(11)</sup>府内の各縣も清に降ったが、龍泉縣は郭維經（龍泉の人。唐王の侍郎）の子應銓らが固守した（四年九月劉一鵬が陥し應銓も死す）。また吉水・永豐では王來八・張天威（樂安の人）がゲリラ戦を續けた。<sup>(12)</sup>

袁州府には二年八月清軍が入城、副將何鳴陞・蓋遇時・郭天才らが駐して南明勢力に備える。同年九月及三年九月には湖南・江西境界の鳳凰寨に據る明の總兵黃朝宣の兵が萍鄉に入るがそのつど撃退される。黄は後湖南の清軍に殺されるが、餘黨はなお省界で活動を續けた。

## (四) 江西南部(贛州・南安)

この一帯は江西の中で最も抗清活動が盛んな地であり、清軍の略定が一應完了したのは金聲桓の南昌入城から一年半後の順治三年十月である。贛州府での動きについては便宜上(a)贛縣(府城)を中心とする北部(b)廣東に接する南部(c)福建に接する寧都州一帯に三分して述べる。

(a)南京陥落後、郷紳楊廷麟・劉同升は贛州府に駐する南贛巡撫李永茂と謀り士人を糾合して忠誠社を設立、兵餉を徴して恢復の師を興した。二人は南京救援のため北進していた廣東の兵と合し、九月吉安府を取る。やがて劉は病死、楊は萬元吉と吉安に在ったが三年三月これが清軍の手におちると贛州へ退く。四月清軍も到り、以後約半年間籠城戦が續いた。長びく膠着状態を打破するため、清の南贛巡撫苗胙土は、八月金聲桓もしくは江寧總兵柯永盛が親しく督戦するよう求めている<sup>(13)</sup>。たまたま清軍が福建を略定し唐王を殺したとの報が至ると城内は動搖し、これに乗じて清將高進庫は猛攻を加え、十月四日遂に城を陥した(楊・萬は自殺)。清兵は周邊の州縣を勦平し、府城には苗胙土(後劉武元)、南贛總兵となつた柯永盛(後胡有陞)の下、高進庫ら城を陥した官兵がそのまま留まつた。

(b)南部一帯の州縣には明末から閩王總(閩羅總)ら「廣賊」が横行し、定南・龍南では定南の何氏の家奴楊細徠が創始した「密密教」徒の勢力もあつた。<sup>(14)</sup>その他、龍南の南埠に居る葉之春は義兵を集め「南營」と稱していた。清兵が到るとこれと協力して周邊の奴變を討ったが、後楊坊の郷兵と對立する。これは清の官が間に立って一時和解するが、結局彼は清軍に殺される<sup>(15)</sup>(三年末頃か)。この時誅殺を免れた一族の葉南芝は抗清に身を投じ、四年明の宗室滋陽王の妃と幼子を擁立、「廣賊」馮高鳴と結び生員を殺すなど勢を振ったが、秋には副將孔國治に平定される<sup>(16)</sup>。また前述の密密教徒は四年二月、龍南の劉耀中の下で案に據り叛いた。知縣呂應夏が郷兵と圍むと、閩王總に救いを求める。數日後數百の「閩寇」が到り官兵を大破、多くの郷紳が殺される<sup>(17)</sup>。同じ四年には「賊總教師」(閩王總の一部が密密教徒か不明)袁三總が定南を、<sup>(18)</sup>「粵



寇」謝志良が長寧を包圍する。<sup>(19)</sup>

このように贛州府南部の抗清活動はきわめて活潑である。また「廣賊・粵寇」も頻繁に史料に現れるが、その詳しい動勢については清の廣東經略との関わりも含めなお不明な點が多く、後考に待ちたい。

(c) 東部の寧都・石城・瑞金方面でも「廣賊」と稱される閩王總が明末以來活動している。前述のように王體忠の攻撃によつて南へ退却した永寧王は、寧都で彼らから援兵を募り、(閩王總の四營のうち左營の)張安を得て建昌・撫州兩府を復している。<sup>(20)</sup>清軍が贛州府の攻略に専念している間、東部では閩王總の他瑞金・石城に佃戸を糾合した「田兵」があり(瑞金では沈士昌・何志源二人は百總、千總らの官を置き「田總」と稱す)、石城では吳萬乾が率いる)田租の輕減・免除を求めて田主と對立していた。吳はさらに近くの「客戸」と結んで石馬寨に據り縣城を攻める。<sup>(21)</sup>やがて贛州府城が陥ちると、清軍は東進、かねてから田兵に苦しんでいた生員の協力を得て、四年五月石馬寨を取る(吳は福建へ走るも後殺される)。瑞金の何志源も官兵に殺されたが、田兵はなお盛んで、四年着任した清の知縣徐珩がこれを彈壓すると、田總の張勝が田兵を率いて縣城を攻めている。<sup>(22)</sup>九月には寧都で「客綱總督」と稱していた明の舉人溫應榮の寨を清軍が圍み、應榮と父國奇を招降する。<sup>(23)</sup>(後殺す)。以上のように抗清勢力は次第に討平されていくかに見えたが、金聲桓が反亂を起こすと、閩王總・客綱は活動を再開するのである。

江西の西南端、南安府でも明末から「廣賊」閩王總が盛んで、唐王政權の官はこれを招撫して官軍化しようと謀るが目論見どおりにはいかなかった。上猶に據つた曹志堅は、楊廷麟と贛州を守つたが、三年十月に贛州・南安兩府城が清軍に制壓されると、上猶に戻つて「土賊化」する。

以上の如く江西南部では①官紳達が贛州府城を中心に三年十月の陷落まで清軍に抵抗し②他地域では「土賊」・閩王總(「廣賊」・田兵・客綱・密密教徒らの集團が各々自己の基盤を確保するため割據していた。清軍は①の官紳達をまず亡ぼし、②の各地の勢力を個別に掃討しつつある時に金聲桓の反亂に遭遇するのである。

ここで改めて金聲桓の反亂以前の清朝の江西經略の過程をまとめておく。

薙髮令以降順治三年末頃までは各地に起事の兵があった。そのにない手は多様であるが概して官紳・生員らが中心と言える。南昌の金に對し二年末頃までは①湖東の永寧王を中心とする勢力と②中西部（吉安）以南の楊廷麟らを中心とする勢力があつて、各々南昌奪還を目指し北上を試みたが失敗している。清軍では①に對しては王得仁（初期は王體忠）が、②には劉一鵬が主に防備に當る。なお南昌の東の廣信府、西の寧州・武寧にも復明勢力が在ったが、積極的に省城を窺う事はなかった。①は三年一月の永寧王の死とその直後の廣信府失陥により、②は三月末の吉安府陷落によつて各々痛手を受け、八月の唐王政權の滅亡でその氣勢はそがれ、十月の贛州の陷落と楊の敗死は清の江西支配を決定的なものにした。

この後湖東では他省との境界で揭重熙・傅鼎銓によるゲリラ戦が續き、南部では前述のようにさまざまな抗清勢力が複雑な動きを見せる。王得仁は湖東と省城を往來し、劉一鵬は吉安に駐し、贛州には激戦の末城を陥した高進庫ら江南よりの援兵が留まつて「土賊」の勦平に當る。<sup>(24)</sup>

四年末頃までの抗清の状況はおよそ右の如くである。次に同じ時期の金聲桓とその周辺の動向をさぐつてみたい。

### 三 金聲桓と清朝の江西への施策

ここでは『順治實錄』や『明清史料』などに據りつつ、順治二年六月以降の清側の動きを金聲桓を中心に記す。

#### (一) 王體忠との争い

前述のようにアジゲから「提督江西全省軍務糧餉總理撫勦總兵官」の肩書を受けた金聲桓は六月十九日南昌に入った。明の官は皆逃亡していたため、金は同じ遼人の貢生耿焯（遼東から關内に亡命、湖廣に流寓してアジゲに降る）に布政使を署理させ（後巡撫をも署理）、一方で逃亡した官紳の財産を沒收、また兄弟や部下を要職につける。彼らはこれを機に大い

に私腹を肥やしたのである。當時中央は正式に地方官を任命しておらず（アジゲの委署した各官を承認したのが七月十日、李翔鳳を巡撫に、金を總兵に任じたのが十月下旬）、金は思いのままに私人を配する事ができた。南昌の士民は金の兵を迎えたため屠殺は免れたものの、彼とその左右の行動に失望の念を抱く。同時に金の副將である王體忠（河南の人）に對しては、その兵が規律正しく財を貪ることが少なかったため好意を寄せたが、これを金が快く思うはずがない。

二人の間の龜裂は清朝が南京平定後下した薙髮令をめぐって決定的となる。前掲丙・5・47は、金が王を殺した後に湖廣總督佟代に呈した釋明書（呈文）であるが、その中で王に三大罪があるとする。①は王が薙髮しなかった點。つまり中央からの薙髮令（南昌に閏六月二十八日到る）やアジゲよりの歸順した民は皆薙髮せよとの命令（七月五日到る）に對し、金とその部下は髮を剃ったが、湖東方面から七月二十一日歸着した王は、周圍の説得にもかかわらず薙髮を肯んじない。これは清朝が彼が李自成の殘黨であることを顧みず用いている恩に背くものであるとする。②は王が建昌の益王を討った際故意にこれを福建へ逃がし、またいったん捕えた史夏隆（もと李自成下の官員）を撫州で脱出させた點であり、③は益王の左右にあった保寧王（明の宗室で河南に封ぜられる。王が益王を攻めた際これに内通）を捕えたにもかかわらず報告せず、王得郡と改名させ保護している點である。

呈文の後半では王を斬殺した経緯を述べる。七月の下旬、王體忠下の遊撃王得仁（陝西の人）が「三十日に王が金と事を議すおりに金を謀殺し、保寧王を立てて建昌に據ろうとしている」と密告してきた。當日、王は親兵數十人と金のもとへ到ったが、あらかじめ伏せていた金の部下が先手をとって王らを斬殺する。残りの王の營兵はこれを知って大舉攻め寄せ、金の兵と城内で夜まで戦鬪が續く。翌八月一日も戦いは續いたが、晝にたまたま湖廣から副將郭天才らの兵が来て金にくみしたため、已に主將を失っている王の兵は一齊に城から逃亡する。金と王得仁はこれを追いつつ來降を勧め、結局殆どどの兵が説得に従い改めて薙髮した。王得仁は王體忠に代わって副將となり、保寧王は湖廣へ送られる。

金聲桓が王體忠を謀殺したのは呈文中の三大罪に加え、王に人望が集まる事への嫉みがあったようだが、ともかく薙髮

しない武將を斷罪した點で、清への忠誠を示したのである。なお王得仁もやはり以前は李自成の下にあり、武勇にすぐれ、この後湖東の抗清勢力に打撃を与えつつ金に協力していく。

## (二) 孫之獬との確執

王體忠を倒したことで江西の官兵は名實とも金聲桓一人の指揮下に屬する事となった。やがて中央で任命された江西の地方官が到着する。まず十月十日に招撫江西の孫之獬（山東の人。天啓二年の進士）が南昌に入った。彼は閏六月末に任命され、途中で江西各府が收服されつつあるとの報を受けながら南下する。しかし到着してみると、湖東及び吉安以南の復明勢力はなお活潑である。二年十月末の孫の洪承疇（招撫江南大學士）への掲帖（『明清史料』丙・6・508）には「金聲桓と新巡撫耿惻は自分に憂慮せぬよう勧めるが、實際の兵は少なく英王・豫王も引上げており、各路の紳士は南昌を奪わんとしている。北京にも出兵を請うたが遠きは近きに及ばない。老先生（『洪』）より江南に駐するベイレに啓して三千〓五千の兵に一グサの將をつけすぐ救援されたい」とある。金としては苦勞して王體忠を殺し、その閒隙に乗じて盛んになった復明勢力を相手に奔走している際に、孫が兵事に口を出して今の兵力では不十分だから南京から滿洲兵を送るよう求めたと聞いて快く思うはずがない。

ともかく孫之獬の要求どおり洪承疇の下から約三千の兵（滿洲兵ではない）が副將高友才・高進庫・楊武烈らに率いられ、三年初め頃到着（吉安府の攻略に参加）。同じ頃北京から江西巡撫李翔鳳・南贛巡撫苗胙土・江西布政使遲變龍らの文官が續々着任、江西統治の體制は整うが、金の權限は逆に狭まっていく。特に金を改めて左都督、鎮守江西總兵官（正式には「鎮守江西全省等處地方駐劄南昌專理撫勦總兵官」）に任ずるという十月二十三日の諭に對し彼は不満を禁じえなかった。彼はアジゲより「提督江西全省軍務糧餉總理撫勦等事駐劄南昌掛討逆將軍印總兵官」（實際は金が自ら肩書を創案し、アジゲが追認したものか）の職を劄委されている。今回の諭では①提督總兵が鎮守總兵に後退し、②糧餉の事務にタッチできなくな

り、③總理撫勦が專理となり、④討逆將軍の稱號が削られる。單に名目上の一部降格としても金には面白くない處置であつた。

金聲桓の不滿をさらに増大させる事件が孫之獬により起こされた。三年一月、金の部將劉一鵬は湖東の復明勢力の中心人物永寧王を捕えた（劉はそれまで吉安府に在ったが、江南からの援兵の到着に伴ない一時湖東の戰線に轉じたようである）。そこで孫は二月二十二日獨斷で劉に總兵官の職銜を與える。孫にとってみれば劉はそれなりの功をあげており、また直後に吉安府への攻撃を控えているためこの處置で劉や兵士全體の士氣を鼓舞しようとの意圖であらう。しかし金は憤慨し北京に啓本を送って孫の措置を非難した。そこでは孫は「やる事は皆デタラメ（乖張）で全く『大臣の體』は無く、朝廷の威をけがすだけである。このため已に定まった地も日々混亂し、未順の地に對し招撫の成果を收める事もできない」と言い、ついで「我が標下の中協副將劉一鵬が『孫老爺』より總兵官の銜を受けたが、あわてて具文して辭したと知らせてきた。自分は江西で懸命に奔走し、將士も自分や朝廷のため盡力しているのに、今回の措置は將士に興心を生じさせるものだ」とする。要は金も總兵に過ぎないのに、その部下に總兵の銜を加えるのは序列を亂す原因になりよくないという趣旨である。<sup>(25)</sup>

孫之獬と金聲桓がここまで不和となると、中央でも對策が必要になる。元來孫は魏忠賢に諂った「閹黨」の一人で士人間での評判は悪く、また特に招撫の功も無く、一方で正式の地方官も揃ったとして、四月七日の諭で北京に撤回させる（後に孫の劉一鵬への加銜は個人的に恩を賣り、金の立場を損なうものとして處罰の對象となる<sup>(26)</sup>）。金はこの事件を利用してもとの「提督撫勦」等の銜がないと「軍民・文武」を制することができぬと訴えた。中央は總兵官が文官を節制しようとは僭越であるとしながらも江西にはなお討つべき賊が多いとして「鎮守總兵官」を「提督總兵官」に改めたのである。<sup>(27)</sup>

### (三) 江西略定後の官兵布置

このように金聲桓の周邊は必ずしも平穩ではなかったのであるが、この間にも清軍の經略は進み、三年十月の贛州陷落

で清の江西支配がほぼ確立したが、同じ頃北京では江西に駐する官兵（綠旗兵）の經制（定制）が決定した。すなわち南昌に提督總兵一人（金聲桓）が、南贛（贛州府）と九江に鎮守總兵が一人ずつ（柯永盛と冷允登。ともに遼人）が駐し各々五千の兵を率いる。袁州には副將一人（二千の兵を率いる）が設けられ保定參將尙登第が昇任する。この他の參將以下や撫標・道標の兵を總計すると江西の經制兵は約三萬となる（なお經制では副將は尙一人のみであるが、實際には王得仁・劉一鵬・高進庫・郭天才ら援兵の將を含めて多くの副將があつて、各地の抗清勢力に備える）。

前述の如く贛州陷落後は王得仁が湖東一帯を、劉一鵬（吉安に駐）が中西部を鎮壓し、南部では柯永盛の指示の下、高進庫らが掃討を行った。江寧の洪承疇は江西が略定されたとして、四年三月高ら三千の兵の撤回を求める。しかし南贛の撫・鎮は時期尙早と主張、結局高らはその部下と留まる事となる。<sup>(29)</sup>同年秋「土賊」が福建の建寧府城を陷すと、洪の指示により南贛の經制兵二千が副將楊遇明と出陣、さらに南昌に在った郭天才の二千、湖東の王得仁の一千もつぎ込まれる。<sup>(30)</sup>

このように四年以降、金聲桓下の官兵は各地の復明勢力を討つ一方で、鄰接する他省（主に福建）へ援兵として派遣される事となった。清の武將として上官の命に従い他省のために部下を失う事自體は致し方ない。しかし金らの江西略定のための苦勞に比して、清朝の褒賞は必ずしも十分ではなかった。一方抵抗を續けているまゝまった南明勢力としては廣西の桂王政權が残っているだけで、清によると全中國統一も遠くない。統一を完成した王朝が、功のあつた武將を冷遇し、あるいは兵權を奪つて抹殺した事例は過去に少なくない。抗清勢力を討ちながらも、金の胸中には現状への不満と將來への危惧が大きくなつていったのである。かかる心理状態に加え外からの諸要因があつて、彼は清に叛くのであるがその詳細は次章に譲る。

#### 四 金聲桓の反亂の始末

##### (一) 反亂の原因

金聲桓の反亂の原因としてよく擧げられるのが江西巡撫章于天（於天とも記す。三年十月病死した李翔鳳の後任）や巡按董成學（四年二月任）との不和・確執である。諸史料に據れば章は金や王得仁に對して侮蔑の態度を隠さず、かつ諸將が抗清に走った宗室・官紳の財を得ているのを知り、彼らから賄賂を貪った。また布政使衙門で行われた宴の際は、故意に金・王二人を差別して辱しめ、董も金・王の不滿を察知するとこの事を上奏すると脅しつつ賄賂を強要していた。<sup>(31)</sup>

金・王が章・董からかかる仕打ちを受けた理由は何か。章・董が貪欲な人物で、金・王が彼等から狙われるだけの財を江西略定の過程で得ていた點も確かであるが、ここでは彼らの確執の背後にあるより政治的な要因に觸れたい。章・董が着任した順治四年頃には、清朝は已にその領土となった地（廣西・雲南・貴州・四川と湖南の一部以外）への支配を強める必要があった。すなわち軍事力で抗清勢力を平げる一方、熟練した文官を送って地方行政を圓滑にし、兵亂で破壊された經濟・社會を立て直し、税糧を得て國家財政を確立せねばならない。そのためには多くの部下を持つ明末以來の漢人武將は（たとえ遼人の金であつても）中央の方針に従って兵數を削減したり、他省への調遣に應じねばならない。それまで大目にみられていた地方の混亂に紛れての財産の掠奪・横取りは嚴禁される。部下の任免についても一々兵部や督撫の指示を仰がねばならない。右のような制約の中で、素直に上級官の指示に従い、清朝の武官の一員としての義務を忠實に果してこそ自身の地位と安全が保證されたのである。

こうした清朝の意向を背にした文官（督撫）の壓力に不滿を持ち、これを排除しようとする者は、結局復明勢力側に寝返るか自暴自棄的な反亂を起こす他なかった。順治四年には漢人武官（總兵官クラス）の中でかかる動きが多發している。<sup>(32)</sup>

これはつまり清朝による統一の實現の見込みがたつようになり、中央が文官による統治（文治）を行政の中心に据えてそれまで權力を振っていた武將を抑制しだしたのがこの年である事を意味する。以上のような中央の政策變更の意を體しつつ、章・董は金・王を侮辱・抑壓し、個人的にも賄賂を強要したのである。

この他の原因として金・王の幕友・書記の一部による「反正」の勧告も無視できない。彼らの中にはかつて南明政權に参加し、その滅亡後歸郷して金らに近づいた者もあった。金の幕下に在った胡以寧（南昌の人。先に左良玉の幕友となる）及びその一族胡濟、王の妻の弟の黃天雷らはさまざまな方法で二人の心を南明側に向かせようと謀る。また諸生中には清に對する嫌惡から金を復明のための起事に立上らせ、それに便乘して南明側に自己を賣り込もうという投機分子も少なくなかったようである。

以上の①清朝（その意を汲む江西の文官）よりの壓力、②その隙につけ込んだ幕友・諸生達の「反正」の勧告の他に③各地でなお抵抗を續けている抗清勢力の存在も金・王の反亂の原因たりうる。粘り強くゲリラ戦を行う彼らの力量については、敵對した金・王とその部下が一番良く認識している。もしこれらの勢力を味方に組み入れる事ができれば、無敵を誇る八旗兵とも十分渡りあえるのではないかという目論見を抱いたであろう。

およそ右のような原因で反意を決した金らは腹心の部下・諸生と共に蜂起計畫を練っており、敵であるべき復明勢力の一部とも氣脈を通じていたのである。

## （二）反亂の經過

金聲桓の反亂の顛末については史料も少なくないが、本稿ではまず反亂中の金・王の動向を示し、ついで反亂に呼應した諸勢力の消長について、地域別に述べてみたい。



## (a) 金・王の動向

金・王が南昌で叛いたのは順治五年正月二十六日深夜である。二人は巡按董成學と湖東道成大業を殺し、また兵を送って當時督餉のため瑞州に向かつていた巡撫章于天を捕え監禁した（後殺す）。また「復明抗清」のあかしとして辮髪を斬り（民にも強制）、隆武四年と稱した<sup>(33)</sup>。とは言え擁立すべき明の宗室がいなかったため、南昌に隱棲していたもと福王政權の大學士姜曰廣を招き、各地に檄を飛ばして舉兵を呼びかける<sup>(34)</sup>。

金聲桓と王得仁は各々豫國公・建武侯と自稱、部下・幕友らにも官職を授けた。かつて唐王政權に参加した諸生は「反正」の實現に喜び、義兵を募る一方で新政府に重用されようと隠し持っていた隆武の年號のある劄を手に南昌へ殺到する。しかし新政府の幹部達は彼らの参入によって自己の權限が狭まるのを恐れ、必ずしもこれを歡迎しない。失望した諸生は金・王以下の官の衣冠・服制が本來の明のそれではないと嘲笑し、またその人事を非難したため、新政府の行政を取りしきる姜曰廣（姜は諸生達が進士出身でなければ就けない官を妄りに自稱するのを憎んだ）や黃天雷は彼らを南昌から追放する。

舉兵直後、王得仁は北進して九江府を陥した（二月）。ついで金・王を中心に幹部達の間で爾後の方針について會議もたれ、①長江を下って江寧（南京）を取る②長江を溯って武昌を奪い何騰蛟らの南明軍と合流する③かつての李自成の如く流動作戰をとる等の案が出た。王を始め大半の幹部は①に傾いたが、金の幕友で新政府の總督となった黃人龍は、北進を良いとしつつも、後顧の憂いを斷つためまず清の巡撫（劉武元・總兵（胡有陞）が駐する贛州を確保すべきだと主張した。金はこれを強く支持し、三月中旬王と共に南進し贛州府を圍む（南昌は宋奎光・黃天雷らが留守）。しかし高進庫らの清軍はよく守り、また反亂軍が高らを「招撫」しようと當初攻撃を控えた事もあって、包圍は三月末から五月初めまで七十餘日の長期に及んだ。

金・王叛すの報が到ると、北京の清廷は反亂軍が長江を下ると豫想して守備を固めさす。しかるに金は贛州へ進軍したため、清側は積極策に轉じ、三月十五日譚泰 Tantai を平南大將軍に任じ、何洛會 Holhoi と共に八旗兵を率いて南下させる。清軍は五月一日九江を復し七日に南昌城下に迫った。南昌の留守部隊は八旗兵の出現に恐慌をきたし、金聲桓の兄金成功（金成勛あるいは金大）らは清軍への内應を企てて宋奎光に殺された。

贛州を圍んでいた金・王は清軍至ると聞いてただちに北へ戻り、十九日南昌へ入城する。この際宋奎光や郭天才（先に福建へ調遣され、巡撫佟國綱と合わず魯王に歸降、後に金の反を知り戻る）は食糧確保のため城外に設營するよう進言したが容れられず、郭のみが城外黃泥洲に駐した（金後十月に入城）。

六月三日、金・王の主力と清軍は七里街で激突、王得仁が活躍したが結局包圍網を破る事はできなかった。この後の戦鬪の様子は『明清史料』丙・8・706、甲・3・233等に詳しい。七里街の戦いで八旗兵の實力を認識した金・王が出撃を控える間に、譚泰は附近の民を徵發して南昌府城を圍む土壕を築き始める。城西の贛江上には浮橋を作り、さらに土砂・材木で水をせき止め人馬が通れるようにし、土壕と城壁の間はみな平地とする。夏の間の突貫工事で巨大な土壕が成ると、譚泰は城の南の永和門附近に樓臺を造らせ、そこから城内の様子を偵察させた。

これに對し金聲桓らは何ら對策を施す事がなかったため、反亂軍の内部からも金らが已に戰意を失っているとみなされ、吳尊周（金の幕友。巡按御史と稱）や殷國楨（新建の諸生）は援兵を要請するとの名目で城から去っていく。土壕完成後、城外から米穀を運び入れる事も難くなる中で、金・王はひたすら援軍の到着を待った。實際は、彼らの舉兵後江西の抗清勢力の活動は盛んになったものの、南昌を救援する程の餘裕はなかった（昨年まで自分達を攻撃していた武將の急な「反正」を俄には信じられなかった點もありうる）。こうして南昌は次第に孤立していく。

秋から冬にかけ城内では餓死者が始め、城を脱して清側に投降する者も續出した。六年になると進賢門を守る湯執中がひそかに來降を約してくる。一月十九日譚泰の兵がことさらに紅衣砲で德勝門を攻撃、金・王がこれを救う間に清兵が

進賢門より登城、八箇月に及ぶ包圍の結果遂に南昌は陥落した。金・姜曰廣は投水して死し、王得仁・宋奎光・郭天才是皆捕殺され、城内の官兵も清軍の屠戮にあう。譚泰はこの後反亂軍の餘黨を討ちつつ南進する。

(b) 江西西北部（南昌・九江・南康・瑞州）

南昌（府城以外） この一帯での反亂への呼應勢力としては武寧守備鄧雲龍がある。『道光・武寧縣志』卷十四、武事に據ると、鄧は無賴出身で以前より不法行爲が多く、民から憎まれていた。金の反亂後その咎を受けて都督と自稱し、附近から壯丁・兵糧を徴し、集めた數萬を三十六の營に編成し副將以下を置く。清の知縣を捕え（後釋放）、ついで金を救うと稱して東進する。譚泰は五年六月、八旗兵を急行させ鄧の軍を大破、鄧は寧州へ逃れ、南昌陥落後明の宗室の王子五人を捕え、これをみやげに譚泰に降った。南昌府下の他の州縣については史料に記載が少なく不明である。

九江 九江府城（德化）は前述の如く王得仁が五年二月に陥し（總兵冷允登は降）部下の吳高を留め、東の湖口にも駐兵させて清の反攻に備える。金・王に呼應して鄱陽湖周邊では諸生金志遠・僧了悟が起ち、その水軍は北上して安徽の東流・建德に迫った。建德では「遣戍罪紳」胡士昌が署知縣の張應杰に迎順を勧めている（胡は三月清兵に捕殺される<sup>(35)</sup>）。

また九江の反亂軍は二月に湖北廣濟に進み、知縣郝光輔を捕え、黃梅では民が清の知縣李鑄を到來した「僞知縣」李廷芳に獻する等、當初金らが江南に押し寄せるとの豫想もあつてこの方面の呼應勢力は少なくなかった。しかし右の二縣は清の下江防道范鳴珂の攻撃を受け、早くも二月十九日には黃梅が、約十日後には廣濟が陥落した。

金聲桓らが贛州を圍む間も九江一帯は反亂軍の手にあったが、清軍が迫ると閏四月三十日湖口が、五月一日九江府城が陥ちる（吳高は逃亡）。金・王が南昌へ歸還した後、王得仁は再び九江を奪おうと謀ったが姜曰廣らの反對で實現しなかった。

南康 南康府城（星子）では金の部將白之裔（もと明の副將↓清に降）が反亂に應じ、他に生員吳江が星子で、明の總督余應

桂が都昌で、孔徹元・徹哲兄弟と蔡觀光（ともに庶民）が建昌で舉兵する。特に余のような大官（彼は甲申・乙酉の際は家居）のそれは注目に價する。彼らはみな以前目立った抗清活動の経験がない。にもかかわらず鄱陽湖北で彼らが起事したのは、反亂軍が今後安徽方面へ進むと豫想したためであろう。現に吳江は王得仁の九江・湖口での戦いに加わっている。

しかるに金・王が贛州へ向った後は彼らのみで北進する事もできず、活動は停滯せざるを得なかった。やがて清軍が到り、主力の譚泰は九江から南昌へ直行し、別軍の副將楊捷（九江を取った後、總兵官を署理）が南康府を攻撃、五月初めに白之裔の兵は潰滅、ついで「巡撫應皖兼轄斬黃光固九江等處地方」と稱して、<sup>(37)</sup>吳江も捕殺される。都昌も十一月頃落城し、ここに據っていた余應桂は殺され、建昌の孔徹哲は南昌包圍戦で死亡、兄の徹元は順治六年に、蔡觀光は七年に各々再蜂起を試みて失敗する。

瑞州 瑞州府では管見の限りでは金・王に應じた勢力の動向を示す史料がない。『同治・高安縣志』卷九、兵事では、譚泰が派遣した朱邦政がよく民を安輯したとあるのみで、それ以前の動向については全く不明である。

(c) 江西東部（饒州・廣信・撫州・建昌）

饒州 府城に駐していた潘永禧（永熙とも記す）は金・王に呼應し、南康府の吳江と連絡を保ったと思われるが詳細は不明である。やがて清の何洛會の軍が安徽南部をへて到り、閏四月三十日府城を復す（潘は逃じ）。何洛會はついで船で南昌へ赴き譚泰と合流した。

廣信 廣信府では當初參將康時昇の守る府城（上饒）<sup>(38)</sup>を除く全縣が反亂軍に應じたようである。西部の貴溪・弋陽には貴溪の盜楊厚林が、鉛山には金の部下王紹忠がそれぞれ據り、永豐でも邑民楊文が同地の武弁李萬年と共に叛く。しかし清軍が南昌を圍むと、康の中軍遊擊趙鳴が鉛山・弋陽・興安・永豐・貴溪の五縣を復し、また建昌の敵を討った。こうして一時期盛んであった廣信府の抗清勢力も五年八月頃までには康・趙ら清の經制兵に鎮壓されたのである。

撫州 撫州府城に駐する張自盛（金の部下で平西伯と稱。峒民〔畬族〕出身）が金に應じ、また金谿では「土寇」と饒州・廣信よりの反亂軍が入城して知縣王顥を拉致するが、その後任の王宗周は團練を組織して防備を固める。撫州・建昌一帯の山中でゲリラ戦を續けていた傅鼎銓・揭重熙は先に金の擧兵直後檄に應じて南昌へ赴いたが、金・王の擧動や新政府がその私人で固められているのを見て失望し軍を引返す。その彼らも南昌が包圍されるとこれを坐視できず、掲は桂王のもとへ救援を求め、傅は張自盛と共に南昌へ馳けつけようとしたが、撫州・南昌の境界の三江口で清軍に敗れる。南昌陥落後清軍が南下すると二人は江西・福建間の山中でなおゲリラ戦を續行する。

建昌 ここも廣信府同様府城（南城）以外の全ての縣が反亂に應じた。南豐では二月七日に金の部將金世選（二十騎）が至り、清の知縣秦克俊を捕えて南昌へ送り、同時に民から兵餉を徴している。「反亂軍側は各縣に「偽知縣」を置き（南豐↓管鑰、新城↓方尙賢、他に陳勝先・鄒英・李子雄ら）、「土寇」の動きも活潑になる。<sup>(39)</sup>

南昌陥落が間近になった五年冬以降、府城を固守していた清軍が攻勢をかけ、「偽官」のうち陳勝先・李子雄が殺される。南昌が落ちた後には、反亂側についた各地の殘兵が福建との省境や宜黃・瀘溪の山中に走り、途中の府内でも掠奪をほしきままにした。

後張自盛は七年冬く八年頃殺され、傅鼎銓は張の死後廣信府の曹大鎬（金の部下。威武侯と自稱）と行動を共にしたが、清軍に捕えられ八年八月處刑される。先に桂王のもとへ赴いた掲重熙も一時は福建で勢力を振ったが、七年捕殺される。<sup>(40)</sup>後曹も死し、金の餘黨は遂に跡を絶ったのである。<sup>(41)</sup>

(d) 江西中西部（吉安・臨江・袁州）

吉安 吉安府でも殆んど縣が金・王に應じた。府城に居る劉一鵬は金聲桓の古參の部下で、反亂軍内での序列も高く漢城侯と稱した。反亂初期には吉安に留まり、金・王が贛州から南昌へ戻るのに従い、南昌陥落の際王得仁や宋奎光・郭天

才と共に殺されたとされる（『清史列傳』卷八十、金聲桓傳など）。ただ『江變紀略』では劉は吉安から東方の撫州へ走って揭重熙と抗清活動を續けたとする。

反亂に呼應した勢力に觸れると、まず泰和縣の巨家（姓は不明）の奴僕劉京（劉金）は黨を集め山寨に據って各地を掠し、永豐では張自勝ら數千がやはり山地に據る。南昌を奪った八旗兵が吉安府に入った頃は一時活動がやんだが、引上げた後はまた活潑な動きをみせる。すなわち六年五月劉京が泰和を陷し、金の餘黨張士舉が永新・永寧を掠す（袁州に在った金の部下蓋遇時も参加）。やがて劉は蓋及び魏林鳳と合し（「紅頭の賊」と呼ばれる）、順治十年に殺されるまで吉安府西部から袁州府にわたる廣い範圍で抵抗を續ける。

臨江 臨江府のうち新淦・新喻二縣の「失陷」は史料より確認できるが、恐らく府下の四縣全てが金・王に呼應したと思われる。ただ當時の「土寇」に關する記述は管見の限り見當らない。

袁州 ここでは金聲桓の反亂以降大きな動きがある。府城（宜春）には三年八月以後尙登第が副將としており、一方で從來から金に隨っていた湯執中・蓋遇時も駐していた。金に應じた湯・蓋は復明を唱える兵士と共に尙を殺して府城を占據する。この他分宜・萬載には棚民（棚賊）が、萍鄉の西には黃朝宣の餘黨が、同じ萍鄉の蘆溪には王應曾が割據していた。五月湯は南へ走り、蓋も十月に吉安西部へ移ったため、空いた府城に棚民の部隊が入り一帯を支配する。六年清軍（總兵趙應奎ら）が到り一月に府城を、二月に萍鄉を、四月に萬載を回復したが、棚民は反亂軍の餘部と結んで激しく抵抗、九月には萬載を陷して「僞知縣」を置き（十月再び清軍が奪回）、十一月には府城を攻める。また七年三月には萍鄉知縣張賓が「土寇」に殺される。このため趙應奎らは府内を奔走して掃討に當らねばならなかった。この棚民と金・王の餘部による抗清活動は順治九年頃まで及ぶ。<sup>(43)</sup>

## (e) 江西南部（贛州・南安）

贛州北部 贛州府城（贛縣）は明代より南贛巡撫が駐する要地である。南贛巡撫は江西の贛州・南安二府の他、福建の汀州・邵武、廣東の潮州・韶州二府及南雄州をも兼轄し、南昌を中心とする以北とは一線を劃していた。金・王舉兵當時、ここには巡撫劉武元、總兵胡有陞、副將として高進庫・徐啓仁・楊遇明らがあつたが、劉・胡は入關以前より清に仕えた旗人、高は江南よりの、徐・楊は湖廣よりの援兵の將で皆金・王との關係は薄い。當地の官兵の中核は三年三月〜十月まで楊廷麟の據る贛州府城を包圍、陥落させた高らの將兵である。本來ならば要衝のこの地に金の腹心の部將が配されるのが妥當であろう。しかるにそれが實現しなかつたのは、贛州一帯の抗清勢力の抵抗が極めて強く、戦鬪によって自己の子飼いの將兵が失われるのを恐れたためであろう。しかし今金自身が叛旗を翻してみると、南方にいわば彼の系列に屬さない兵士が八旗所屬の官の下で駐している事態に不安を抱いたと考えられる。従つて北進策を一時棚上げしてまで贛州の確保にこだわつたのである。

金・王は前述の如く約二箇月餘にわたり贛州府を圍んだものの、結局陷す事はできなかった。同じ江西に駐する武將とは言え、援兵でありながら最前線で苦戦を重ねた高進庫らは、高い官位（提督）を有しながらも實際は南昌で机上の作戰の指揮を執るのみの金に對して日頃から不滿が多かつたであらう。その金が突然「復明抗清」を唱え舉兵しても、かねてより金を快く思わず、かつ直接の部下ではない高らが素直にこれに協力するはずはない。金のこの作戰は正徳年間の寧王と王守仁との關係に鑑みて、自軍の北進を南贛の兵が後方から撃つのを恐れたためだが、當時南贛に接する廣東・福建の抗清勢力の激しい活動を考えると、その危惧はやや思い過ぎしと言えなくもない。

ともかく反亂軍の包圍は譚泰が南昌に迫つたため解け、劉武元らは金の舉兵後一層活潑化した「土寇」（その中には金の「偽割」を受けた者もある）を討つたが、九月には廣州で金に呼應して叛し、桂王を擁立した李成棟の軍が押し寄せてくる。

城内からは高進庫がただちに攻撃して破り、李は信豊へ退く。このまま膠着状態が續く間に南昌が陥落、八旗兵が南下を開始する。これを知って動搖した李の軍を高はすかさず攻撃、六年二月二十九日に信豊で大破し李も戦死する。府城以外の零都では「土賊」や李成棟軍に苦しんだが守り切り、興國は「煙兵」の横行もあつて荒廢したが六年末に清兵により收拾された。<sup>(45)</sup>

贛州南部 この一帯は金・王の反亂以後も閩王總ら「廣賊」が盛んである。贛州の清兵も府城周邊及び寧都方面の鎮定に手一杯で、この地を顧る餘裕はなかった。閩王總は五年九月には龍南を、六年一月には定南を陥して清の知縣を殺す。<sup>(46)</sup>ただ二月に李成棟が戦死すると、やや鳴りをひそめたようである。

贛州東部（寧都） 寧都附近では先に「田兵」・「客綱」・「廣賊」が活動したが、金・王の反亂時には田兵の影は薄れている。寧都では溫應榮の一族とみられる溫應宣が五年三月「客綱」の衆を集めて縣城を攻めるも退けられた。その後かつて楊廷麟の部下であつた彭順慶（賀伯）が同族の彭錕（諸生。楊の幼子を匿まっていたという）と「里巷の無頼」を糾合して「關聖會」を結成する。彼は六年に清の知縣を殺し、縣丞・典史を追放して、「宮保軍門」と稱し彭達慶（大景）らを都堂以下の官に任命する。<sup>(47)</sup>この他石城には五年五月以降金の「偽官」田廣業が據り、後清がいったん復したが六年十一月には張自盛が入つて清の官を殺している。瑞金も閩王總や「土賊」の度重なる攻撃を堪え忍ぶのがやつとであつた。

李成棟を敗死させ、「廣賊」に打撃を与え、ようやく寧都を收拾する餘裕のできた贛州の清軍は、七年二月副將高進庫を總統とし、劉伯祿・孔國治ら四千が東進、二月十一日にこれを陥し彭順慶・彭錕を斬つた。ついで石城の「土賊」も清軍に來降する。<sup>(48)</sup>

南安 先に金・王が贛州府を圍んだ際、金は南安府下の南康を取り、また部下を遣つて廣東・南雄府下の一部の州縣を陥したが、この事は「廣賊」の活動をより盛んにした。上猶では曹志堅が再び舉兵し、閩王總は各城を攻撃する。これ等の動きに對して清軍は六年三月、金の餘黨の「偽充國公」（氏名不詳）を南康に敗り、七月には崇義の「偽燕王」ら「廣賊」



の餘部を退ける。<sup>(52)</sup>そして十二月、尚可喜・耿繼茂が吉安方面から南下した際に府内の多くの抗清勢力が勦滅されたのである。

### おわりに

以上金聲桓の反亂の經過と反亂以降の各地の抗清の動きをざっと記してみた。金の反亂は確かに順治三年末以降やや下火となっていた抗清勢力の運動を再び活潑化させた。とは言え最終的には以下のような理由で失敗に歸したのである。

理由としては①順治二年六月以來、金は復明抗清勢力の征討に當っていた。その彼が舉兵したのは専ら清廷の政策（恩賞が不十分である事、江西の地方官〔文官〕よりの壓力等）への不満が直接の原因であり、何らかの契機によって「反正」復明」に努めるべきだとの強い意識を抱き始めたからではない。従ってたとえ金が復明抗清のスローガンをかかげても、周圍の者はそれが眞に忠義心から出たものとは信じなかったのである。②このため金・王と他の抗清勢力との連攜が甚だ不十分であった。舉兵の事前工作も二人の幕友や主な部下（江西各地〔主に北半部〕に駐する金の子飼いの者、高進庫ら他省よりの援兵は除外されたであろう）で内密に行われたのみであつたろう。舉兵後については③金・王の本隊が江南ないし湖廣に向わず、高らの據る贛州を包圍した事で貴重な時間を浪費し、かつ清軍に反撃の餘裕を與えた。④贛州から南昌へ戻って以後、ひたすら籠城を續けて、来るあてのない援兵の到來を待ち、結局自から破滅を招いた事などが舉げられよう。

一方清廷の中樞にある者にとっては金・王の反亂は必ずしも豫期せぬ突發事件ではなかつたと思われる。前述の如く四年以後、明末以來の有力な漢人武將への拘束を強めていた清廷にとって、金・王の反は彼らが大人しく兵權を手離すのではない限り十分豫想しえたものであつた。むしろ先に金・王が略定した江西を、今回の反亂を機に改めて八旗兵を送って蕩平し、清領の一部として確定させたのである。

金聲桓と同様明末の變亂の中で巧みに身を處し、新興の清朝に協力しつつ實力を貯えていた漢人武將のうち、廣東の李

成棟、大同の姜瓖が金の反亂が鎮定される以前にやはり清に叛き、金と同じように「逆臣」として誅滅される。「逆臣」となった漢人武將（彼らが「逆臣」となった原因を探れば、清廷の政策に因る事が多いが）の反亂の鎮定は、眞の中國統一を目指す清朝にとり缺く事のできない一プロセスであり、これを克服して始めて正統王朝としての政權基盤が確立していくのである。

## 註

- (1) 吳勝兆・李際遇・高進忠・王光恩等を指す。
- (2) 周文郁『邊事小紀』卷三「協勦紀事」參照。ここでは金聲垣とするが聲垣の誤りであろう。
- (3) 『國權』卷九九。
- (4) 『清史列傳』卷七九「左夢庚傳」。
- (5) 『明清史料』丙・5・497「江西提督金聲垣呈總督修文」等參照。
- (6) 清初における遼人の任用に關しては他日稿を改めて觸れてみたと思う。
- (7) 『明清史料』丙・6・551「江西巡撫李翔鳳揭帖」、「道光・義寧州志」卷一三、武事。
- (8) 『明清史料』甲・2・156及び159「江西巡撫李翔鳳揭帖」。
- (9) 『小腆紀年附攷』は永寧王の死と撫州的陷落を三年四月とするも、今『順治實錄』卷二三、正月十三日の條に従う。
- (10) 『明清史料』丙・6・529「江西巡撫李翔鳳揭帖」。
- (11) 『小腆紀年附攷』卷一二。
- (12) 『明清史料』丙・7・641「江西巡撫章于天揭帖」。
- (13) 『順治實錄』卷二七、三年八月十三日。
- (14) 『乾隆・贛州府志』卷二六、軍政下、武事。楊細篲及び密密教については大澤顯浩氏「明末清初の密密教について」（『山根教授退休記念明代史論叢（上）』、一九九〇、所收）參照。
- (15) 『道光・龍南縣志』卷三、政事志、戡寇。また『光緒・上猶縣志』卷七、兵防志、兵事に見える「流寇葉枝春」も同一人物か。
- (16) 註(15)の『道光・龍南縣志』と同。
- (17) 同右。劉耀中の反亂については谷口規矩雄氏『金・王の變』とそれを巡る諸反亂（『大阪大學教養部研究集録』三八一、一二頁參照）。
- (18) 『乾隆・定南廳志』卷五、祥異、兵寇。
- (19) 『光緒・長寧縣志』卷三、軍政志、兵寇。
- (20) 『小腆紀傳』補遺卷一、宗藩。
- (21) 『道光・寧都直隸州志』卷一四、武事志。
- (22) 同右。
- (23) 『明清史料』丙・7・637「南贛總兵柯永盛題本」。

- (24) 最も抗清運動が盛んな南部に金の直接の部下ではない江南の援兵が駐屯した事は、後の金の反亂の行方に大きな影響を與える(後述)。

- (25) 『明清史料』丙・6・515「江西總兵金聲桓殘啓本」。また『清史列傳』卷七九の孫の傳では、彼は高進庫にも總兵の銜を與えようとしている。

- (26) 『順治實錄』卷二八、三年十月二十日。

- (27) 『順治實錄』卷二六、三年五月十五日。

- (28) 『順治實錄』卷三二、四年五月二十日の條では劉を「南昌府副將」とし、『明清史料』甲・3・220「浙江福建總督張存仁揭帖」では郭を「江西忠勇營副將」とする。

- (29) 『清史列傳』卷七八「高進庫傳」。

- (30) 『明清史料』丙・7・618「江西巡撫章于天揭帖」。

- (31) 『清史列傳』卷八〇「章于天傳」、「江變紀略」卷一、『三藩紀事本末』卷三「金王之亂」等。

- (32) 註(1)で擧げた武將のうち、蘇松提督吳勝兆は四月謀叛を畫つて失敗、五月には總兵李際遇・丁啓光らが賊黨王道士と通謀していたとして一族と殺され、六月には武器を隠し持つていたと下僕に告發された總兵高進忠が誅に伏し、同じ六月には鄖襄總兵王光恩が罪により逮捕されたため弟の王光泰らが擧兵する。

- (33) これは順治三年に清軍に殺された唐王がひそかに生存しているとの噂を信じたためだが、後事實無根と知ると廣西の桂王を擁立する形を取つて永曆二年と稱した。

- (34) 金の檄は河南總兵高第のもとにも送られている(『順治實

- 錄』卷三七、五年三月二十三日)。

- (35) 『國朝史料零拾』卷二「安徽巡撫王懷揚帖」、「明清史料」丙・7・661「江南總督馬國柱題本」。

- (36) 『明清史料』甲・3・222「湖廣提督柯永盛揭帖」。

- (37) 『明清史料』丙・8・701「江南總督馬國柱揭帖」。

- (38) 『明清史料』甲・3・260「江西巡撫朱延慶揭帖」に據ると康時昇と趙鳴は共に山東膠州の人で金の至つた順治二年六月以前より江西に駐していたようである。

- (39) 『同治・南城縣志』卷五之五、武備志、武事。

- (40) 『順治實錄』卷五〇、七年十月二十日。

- (41) なお張自盛・曹大鶴と洪國玉、李安民(洪・李は揭重熙と同じ頃捕われる)の四人は、金・王の餘衆と福建との境界に據つて「四大營」と呼ばれる。

- (42) 『康熙・新淦縣志』卷五、農政志及び『順治實錄』卷四六、六年十一月三日。

- (43) 『同治・宜春縣志』卷五、武備志、武事、『同治・萍鄉縣志』卷五、武備志、武事、『乾隆・袁州府志』卷一五、武備、兵氣。

- (44) 『明清史料』丙・8・121「南贛總兵胡有陞揭帖」。

- (45) 『乾隆・零都縣志』卷一一、紀事志、縣事、『同治・興國縣志』卷一四、武事。

- (46) 『道光・龍南縣志』卷三、政事志、戡寇。『乾隆・定南縣志』卷五、祥異、兵寇。

- (47) 『明清史料』丙・8・752「南贛巡撫劉武元揭帖」。

- (48) 『明清史料』丙・8・752及び丙・8・755「南贛巡撫劉武元

殘掲帖」。

(49) 『道光・南雄直隸州志』卷三四、編年。

(50) 『光緒・南安府志補正』卷一〇、武事。

(51) 『順治實錄』卷四三、六年三月二十五日。

(52) 『明清史料』丙・8・163「南贛巡撫劉武元奏本」及び甲・

3・253「南贛巡撫劉武元掲帖」。

附記

本稿は金聲桓という明末清初の一武將の動向を通じて、當時の武官の位置やそれに對する入關直後の清朝の施策を明らかにしようとしたものである。一部で抗清運動についても述

べたが、主眼は漢人武將への考察であり、この點先の拙論「大同總兵姜瓖とその反亂」『史苑』48-1、一九八八」と軌を同じくする。なお最近明らかになった谷口規矩雄氏の論考（『金・王の變』とそれを巡る諸反亂）『大阪大學教養部研究集録』三八、一九九〇）は特に贛州方面に重點を置きながら、金・王の變と呼應勢力の動向に觸れられた、吳金成氏「明末・清初江西南部の社會と紳士」（『山根教授退休記念明代史論叢（下）』、一九九〇、所收）も明・清間の贛州の戰亂と社會について論じられているが、兩氏の研究成果を本稿にとり入れる時間的餘裕がなかった點を附記しておきたい。

in economically advanced districts. As a result the great confusion were aroused in society and economy. In this article I try to describe the political history first, that Zhangshi, the empress of Xiaozong 孝宗, kept her influence during Hongzhi 弘治, Zhengde 正德 and the early years of Jiajing 嘉靖. And I analyse their own way of securing the source from the aspects of estate, commercial tax and salt, which her brothers (Zhang Heling 張鶴齡 and Zhang Yanling 張延齡) took by making use of the opportunity. Its character is that dividing the possession of the state, they established their own organization of exploitation, and controlled Jiaren 家人 stratum (wulai 無賴, landlords, merchants, etc.), who were parasitic on it. But once they lost their support in the court, most of imperial consort fell rapidly. Their foundation of power was uncertain.

## THE JIANGXI PROVINCIAL MILITARY COMMANDER JIN SHENGHUAN 金聲桓 AND HIS REVOLT

WATANABE Osamu

The purpose of this paper is to understand the position of Chinese military officers from the late Ming to the early Qing by considering the movement of the Qing's provincial military commander Jin Shenghuan who rose in revolt in Jiangxi in the 5th year of Shunzhi 順治 (1648), and was put down in the next year.

I describe briefly that Jin Shenghuan before the 5th month of the 2nd year (of Shunzhi) when he surrendered the Qing troops, put together region by region the process that it controlled Jiangxi suppressing the restration power of Ming dynasty from the 6th month of the 2nd year to about the 10th month of the next year. And I try to research the background of the revolt mentioning the affairs about Jin (the conflict with Wang Tizhong 王體忠, the discord with Sun Zhixie 孫之獬) in Jiangxi after the 6th month of the 2nd year. And I take it as the direct cause of revolt that the Qing dynasty changed the policy for Chinese military officers in the 4th year and

civil officers (for example, Jiangxi provincial governor 巡撫 Zhang Yutian 章于天) looked down on them, and I refer to the progress of revolt according to the regions.

So, I point that the Qing dynasty controlled all parts using the power of military officers like Jin, but it excluded their domination in order to build up the power base and realized the real unity.

## THE TRANSITION OF LAW IN THE EIGHTEENTH-CENTURY KHALKHA MONGOLIA

HAGIHARA Mamoru

As to the legislation of Khalkha Mongolia (Outer Mongolia) under the reign of the Qing dynasty, the following facts have been known, that is, the fact that they had established laws by themselves before 1728, and the cases of application of the Mongol Code of the Qing government 清朝蒙古例 (the Mongol Code enacted by the Qing government) after 1789. However there are no studies about the legislation of that sixty years, so the change from the original law of Khalkha to the Mongol Code of the Qing government has not been clear at all.

This article fixed that the unidentified law, applied in 1784 to the case of a horse thief in Khalkha, was the one established in 1746 by the royalty of the four parts of Khalkha, and then proved that (on the other hand) the same law was the compromise law interpreted and revised independently by Mongolian from the Mongol Code of the Qing government. And this article discovered that a part of the law of Mongolia, and supported that the change from the original law of Khalkha to the law of Mongolia by the Qing dynasty had progressed gradually during about sixty years, namely, from 1728 through the compromise law of 1746 to 1789. The author considers that this change was not made at once but was made little by little using both laws.